

変革の先端で: 持続可能な世界への移行に エコロジカル・リテラシーは有効か

サラ・マチルドン

キーワード: エコロジカル・リテラシー, 環境教育, 持続可能な開発の為の教育, ディープ・エコロジー, 連携, 乖離, 変形学習, シューマッハ・カレッジ

1. 序章

過去 250 年間に人類はその歴史上、最も早いペースで地球を変容させた。我々は自然資源が再生するよりも早く消費を行い、漁業資源のバランスが崩壊するほどに摂取した。自然のシステムの許容範囲内で生活を営むためには、製造と消費のパターンを根本的に変革する必要があるだろう。そのためには、科学的に証明された現実に基づいた思考を養わなければならない。エコロジカル・リテラシーが必要とされている。エコロジカル・リテラシーとは、自分自身を知り、我々はどこから来たのかを知ることであり、それは私達が自然環境の一部であること（自然環境から切離された存在ではないこと）を理解することである。「エコロジカル・リテラシー」という用語は 1990 年代に David Orr と Fritjof Capra によって広く知られるようになった。彼らによれば、それは単なる受動的な知識の取得を意味するのではなく、地球上の生命を司る自然のシステムを理解し、その法則に沿って生きることである。

2. 研究手法

本論文ではなぜエコロジカル・リテラシーが必要なのか、どの様に使用され、どの様な効果を持っているのかを検証する。そのために Schumacher College で開講されている 6 ヶ月間のエコロジカル・リテラシー講座を事例として考察する。エコロジカル・リテラシーについては理論研究も盛んになされているが、コミュニティ・イニシアティブの構築、持続可能な農業、エコデザインに取り組むなど、実践面でも成果をあげている。2011 年 10 月に筆者は 2 週間同校に滞在した。その目的は 1) 6 カ月集中講座の試験的講義を受講すること、2) エコロジカル・リテラシーの実践を Schumacher College の事例から検証することにあった。

3. 結論

単に環境に関する事実を教えるのではなく、変化を促すような個人的で深い環境教育を行うことはどの様にしたら可能だろうか？これは答えよりも多くの疑問を生むような種類の挑戦かも知れない。エコロジカル・リテラシーは地球上に生きる物との関係性を現実的に見つけ、より持続可能な選択を可能にする。しかし複雑でまだ発展途上のコンセプトでもある。それゆえに、エコロジカル・リテラシーをデザインし実践することは難しく、特に従来の学問別に分断されたアカデミックな世界で教える事には困難も多く伴う。エコロジカル・リテラシーの重要性はまだ認識され始めてから日が浅く、まだこれから発展していく分野であろう。しかし同時に教育を行ううえで緊急に必要とされる新しい手法でもある。Schumacher College のエコロジカル・リテラシー講座は持続可能な世界へと変化するために必要な、より深い教育を実現する青写真を提示している。